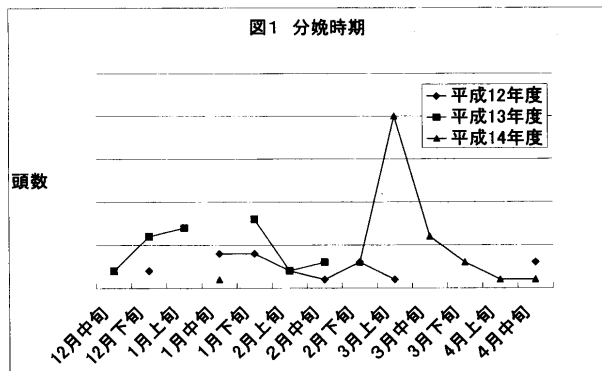


表1 死亡原因

症 状	12 年	13 年	14 年
腰麻痺	3	2	1
条虫			6
臃脱	1	4	
子羊（ミルク不足, 圧死）	1	2	1
タヌキ	2		
不明	1	2	2
計	8	10	10



重以下である。放牧中に死亡したものは6頭である。

考察

死亡の原因として腰麻痺、条虫などが多くみられる。病気になる要因は分娩時期が3年間を見ると年々遅くなる傾向にある。放牧開始時期の体重が13年と14年では12kgの差があり、十分に発育せず、例年通りの時期に放牧を開始したため、後に生まれた子緬羊の放牧中の斃死が増えたものと思われる。

改善点

分娩時期のピークが昨年度から2ヶ月ほど遅れている。放牧開始時期は例年通りである。分娩後の親子の栄養状態が悪いためと考えられる。

次年度に向けて

- 1) 発情誘発剤等を用い分娩時期を早め1月頃にする。
- 2) 放牧開始時期を1ヶ月遅らせる。
- 3) 早期離乳し別飼いとす。

5) 種雄牛の管理方法についての研修報告

山地放牧システム科：千葉 孝

平成15年3月11日から12日まで、岩手県JA宮古農協岩泉支所と岩手県農業研究センター畜産研究所種山畜産研究室を訪問し種雄牛の管理方法について研修を受けた。

JA宮古農協岩泉支所管内では、日本短角種種雄牛11頭（内1頭は岩手県農業研究センター畜産研究所）を所有していた。それらを放牧前に削蹄と引き運動を行った後、牧野組合11ヶ所に5～10月までまき牛として貸出している。種雄牛1頭当たりの雌牛の頭数は約50頭で、1年毎に各牧野組合をローテーションしている。11～4月には管理組合2ヶ所で集中管理しており、単房内で係留し配合飼料と乾草を給与している。敷料にはオガクズを使用し、1日に2回糞を除いている。

当支所管内における日本短角種種雄牛の問題点として、種雄牛の子供は増体重視の選抜をかけてきているため増体が大きすぎることから、今日では肉質を重視した改良も行っている。また、種雄牛の中でも1,000kgを超えるものがあるため、雌牛に負担がかかる心配がある。

岩手県農業研究センター畜産研究所種山畜産研究室では、黒毛和種種雄牛の検定事業と精液の採取と販売を行っている。種雄牛は単房飼養され、検定用の配合飼料と乾草が給与されている。牛床はマットの上にオガクズが敷かれ、床面が緩やかな傾斜になって排泄物等の水分が排出されやすい構造となっていた。また、牛舎は非常に清潔で伝染病予防のための消毒が徹底されていた。この他に、種山畜産研究室では農家の牛の委託放牧を実施している。この際、放牧前に寄生虫駆除のための投薬を徹底しているということであった。

本研修では「種雄牛の管理方法」を目的として見学した。飼料の種類や給与量は当フィールドセンターと大きな違いはみられなかったが、牛床の管理方法は大きく異なっていた。すなわち、敷料にはオガクズが使用され、毎日掃除をしているため牛舎が清潔に保たれていた。一方、当フィールドセンターではワラを使用し、掃除は月1回のため牛床が汚れ、掃除にも時間がかかっている。本研修場所のように毎日掃除を行えない理由として作業者の人数が少ないことや牛舎の構造上単房が狭いため作業者に危険があることがあげられる。これらの問題を解決すれば当フィールドセンターでも毎日掃除することが可能と思われる。また、JA宮古農協岩泉支所では放牧前に削蹄及び引き運動を実施しているが、当フィールドセンターでも放牧時の事故防止のため削蹄及び引き運動の導入が重要であると思われる。